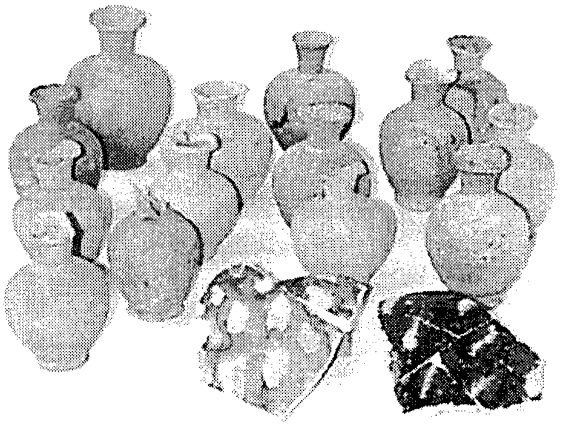
梅ヶ畑祭祀遺跡

発掘調査現地説明会資料



出土遺物

1997年6月15日

財団法人　京都市埋蔵文化財研究所

梅ヶ畑祭祀遺跡現地説明会資料

所在地　　右京区梅ヶ畑向ノ地町
調査期間　1997年5月16日～継続中
調査面積　約320㎡

1　調査に至る経過

本年４月１日より梅ヶ畑銅鐸出土地の隣接地として、丘陵の掘削工事に伴う立会調査を実施していました。４月21日に調査地の地形を見るため、重機の通路を伝って頂部へ登る途中で若干の土器片が散乱しているのを発見しました。また、丘陵の北東斜面に多量の土器類を含む層を確認しました。

その後、北東斜面を中心に遺物の採取と分布状況把握を目的として、掘削が予定されている丘陵全体を調べたところ、人為的に形成されたと考えられる平坦な箇所を頂部と東斜面などで数箇所確認しました。よって関係機関と協議のうえ、５月16日より発掘調査に入りました。

2　遺跡の位置

遺跡は、京都市の北西部、嵯峨野の北の丘陵地にあたります。丘陵を北西から南東へ流れ出る御室川が開削した谷筋の南側の丘陵の一つで、北側が扁平で北東と北西に尾根のある北東に突き出た小丘陵に立地しています。丘陵の前面には周山街道（現国道162号線）が谷筋に沿って走っており、西へ進むと平岡八幡宮や神護寺・高山寺に通じています。

遺跡の周辺では、1964年の丘陵東裾部の宅地造成のときに弥生時代中期の銅鐸４個（外縁付鈕式四区画袈裟襷文銅鐸）が出土しています。丘陵の南方には古墳時代後期の群集墳、御堂ヶ池古墳群が知られています。御堂ヶ池古墳群は全部で27基の古墳から成っており、これまでに10基が調査されています。また、1992年の下水道工事では道路の下に２号墳が残っていたことが分かりました。なお、このうち１号墳については山越の交差点の南東、さざれ石山に移築保存されています。

3　調査の概要

調査区は、丘陵の頂部（Ａ－１・４地区、Ｂ地区）と北東斜面部（Ａ－２・３・５地区）、東斜面の平坦部（Ｃ地区）に設定しました。遺物は北東斜面部を中心に、これまでに整理箱に50箱以上出土しています。

（１）丘陵の頂部（Ａ－１・４地区、Ｂ地区）

丘陵の頂部は、北端から岩を中心としたＡ－１地区、礫をまばらに配したＡ－４地区、人頭大の礫を敷き詰めたＢ地区の大きく三つの地区があります。地形的にはＡ－１地区が低く、Ｂ地区

に向けて段状に高くなっています。

Ａ－１地区：平坦面の南寄り中央に一抱え以上ある岩を中心とした地区で、平坦面を形成する黄褐色砂泥層が厚さ５～10cm程あり、土師器や須恵器の破片とともに銅銭（「隆平永寶」；延暦十五年［796］初鋳）が１枚出土しました。

※岩が人為的に据えられたものか、自然に露出していたものかは現在調査中

Ａ－４地区：Ａ－１地区の南、やや盛り上がった地区。拳大の礫をまばらに配しており、土師器や須恵器、二彩陶器などの小片を含む黄褐色泥砂によってＡ－１地区よりも高められています。

Ｂ地区：径10mほどの円形の高まりの中央に東西2.5m、南北2.3mほどの範囲の不整な方形の礫敷遺構を検出しました。50cmほどの礫を平坦な面を造るように配しており、礫の間や下から土師器、須恵器の小片とともに銅銭３枚（いずれも「神功開寶」；天平神護元年［765］初鋳）が出土しました。土器の出土量は多くありませんが、土師器（杯・甕）、須恵器（小型壺・甕）などがあります。

現在、石敷の下にさらに遺構があるかどうか、円形の高まりが人為的な盛土によるものかどうかなどを調査中です。

（２）北東斜面部（Ａ－２・３・５地区）

丘陵の北東に張り出す先端部の斜面から東斜面にかけての地域です。調査の都合上、三つの調査区に分けていますが、一連のものです。

土器類の出土の多いのは丘陵頂部の平坦部から下方へ20m前後まで、幅は北東に張り出す先端部尾根付近から南へ15m前後の範囲です。この斜面部は傾斜に緩急があって、比較的緩くなった部分に土器が集中しており頂部付近から転落してきて溜まったものと思われます。

出土した遺物は、土師器（皿・杯・椀・蓋・高杯・甕・羽釜）、須恵器（杯・椀・蓋・瓶子・甕・壺・平瓶）、黒色土器（椀）、二彩陶器（皿・鉢・壺）、緑釉陶器（皿）、灰釉陶器（皿・壺・硯・浄瓶）、瓦（丸瓦・平瓦）、製塩土器のほか、少量ながら土馬と考えられる破片や銅銭、鉄釘などがあります。土器類は、いずれも９世紀前半代に位置付けられるものです。土器類の中では、土師器の皿・杯・椀類が最も多く、次いで須恵器の杯・椀が多くあります。土師器の甕や須恵器の甕・瓶子なども目立ちます。また、土師器の皿や須恵器の蓋の中には墨で文字を書いた痕跡のあるもの（墨書土器）もありました。銅銭には和同開珎（和銅元年［708］初鋳）１枚、萬年通寶（天平宝字四年［760］初鋳）１枚、隆平永寶１枚、富寿神寶（弘仁九年［818］初鋳）２枚があります。今回の調査で出土した遺物の90％以上はこの北東斜面部から出土しています。

（３）東斜面の平坦部（Ｃ地区）

Ｂ地区の東下方、東斜面には人為的に斜面を削り出して造ったと思われる方形の平坦面があります。この部分ではこれまでに柱穴と考えられるものを少なくとも８基検出しました。現在調査中ですので明らかでないことも多いのですが、出土した遺物から10世紀代の柱穴と思われ、頂部

や北東斜面部の遺物と比べると新しいものであることがわかっています。

4　まとめ

現在、まだ調査中で明らかでないことも多いのですが、これまでにわかっていることを記してまとめに替えたいと思います。

丘陵頂部：整地による平坦面、礫をまばらに配した整地層、円形の高まりの中央に不整な方形礫敷遺構を確認しました。

北東斜面：９世紀前半代の多量の遺物を含む包含層を確認しました。

東斜面　：方形の平坦面と10世紀代の柱穴を確認しました。

出土遺物：土器類は種類が豊富で、なかには墨書土器もあり、平安京内でもあまり出土していない二彩陶器の皿・鉢・壺などがあります。また、須恵器の瓶子が多く、壊れていない完全な形のものが目立ちます。銅銭には皇朝十二銭といわれる12種類のうち、和同開珎をはじめとした５種類が出土しました。

現在調査中であり、多量の遺物もまだほとんど洗えていませんので、今後遺構や出土遺物の詳細な検討が必要ですが、これまでの状況から、この丘陵の頂部を中心として何らかの祭祀が行なわれ、その時に用いられた土器類が、北東斜面に捨てられたものと考えています。銅銭には、この丘陵を祭祀場として使うにあたって、山の神や地の神に対する地鎮の意味合いが考えられます。遺物の多さから見て、一度限りではなく何度もこの場所で祭祀が行なわれたと思われます。

なお、『日本紀略』や『扶桑略記』などの文献史料に祈雨の記事が見られます。こうした記事から、この遺跡は平安時代前期に陰陽寮によって行われた祈雨の祭場の一つと考えられます。

『扶桑略記』二十三　裏書　延喜二年六月十七日　（９０２年）

「十七日辛卯。左大臣巳下就レ陣。依二祈雨一。定二山稜使一。又依二同事一。召二陰陽寮一。自二今明日一。於二乾方一。可レ勤二五龍祭一之由仰下了。其地鳴瀧北十二月谷口。」

《お願い》

今回の調査区は山頂にあり、現場へは足元の悪いきつい傾斜面となっております。見学に際しての通路も有りません。誠に恐れ入りますが、現地への入場はご遠慮頂きますようにお願い申しあげます。

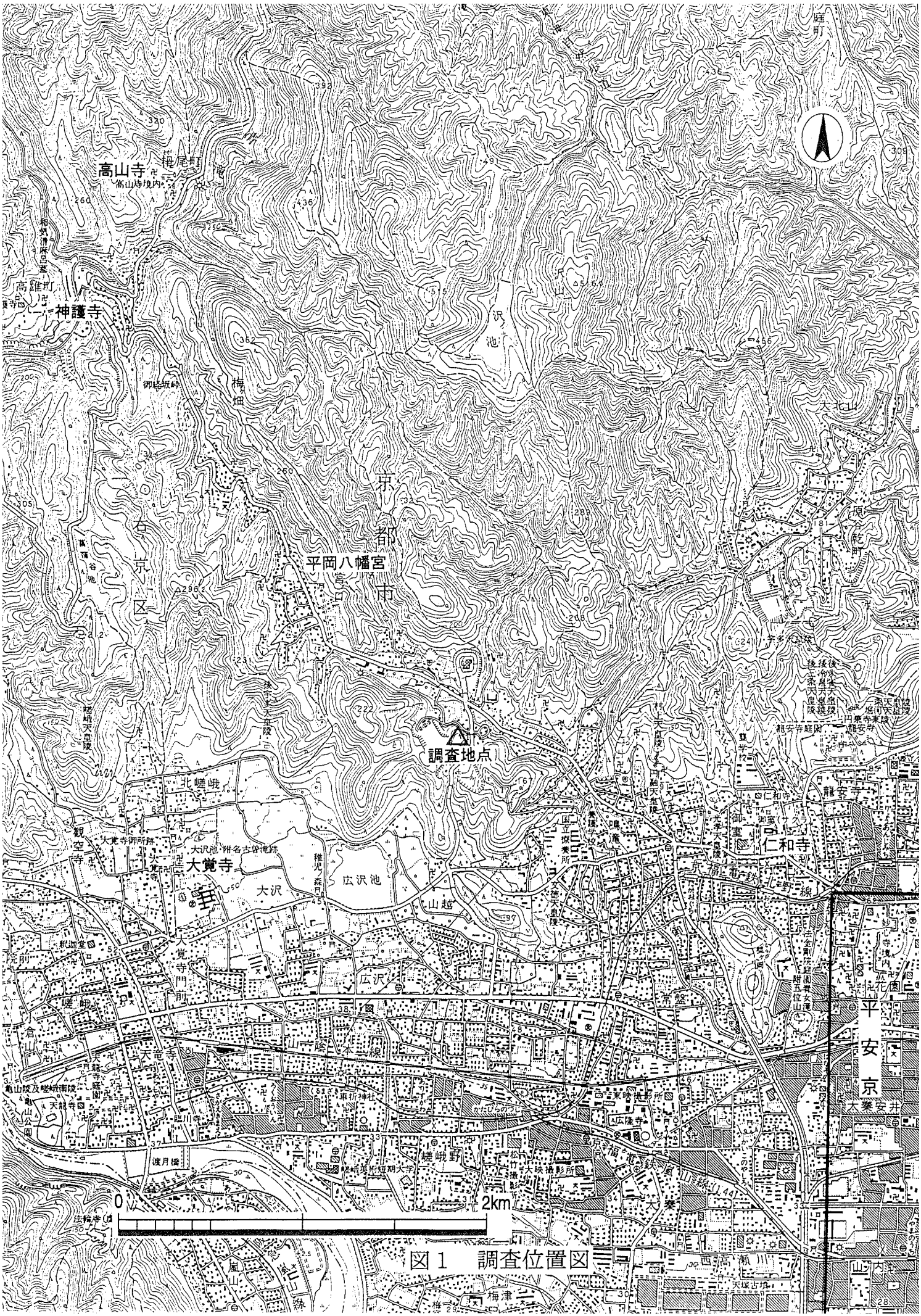


図１　調査位置図

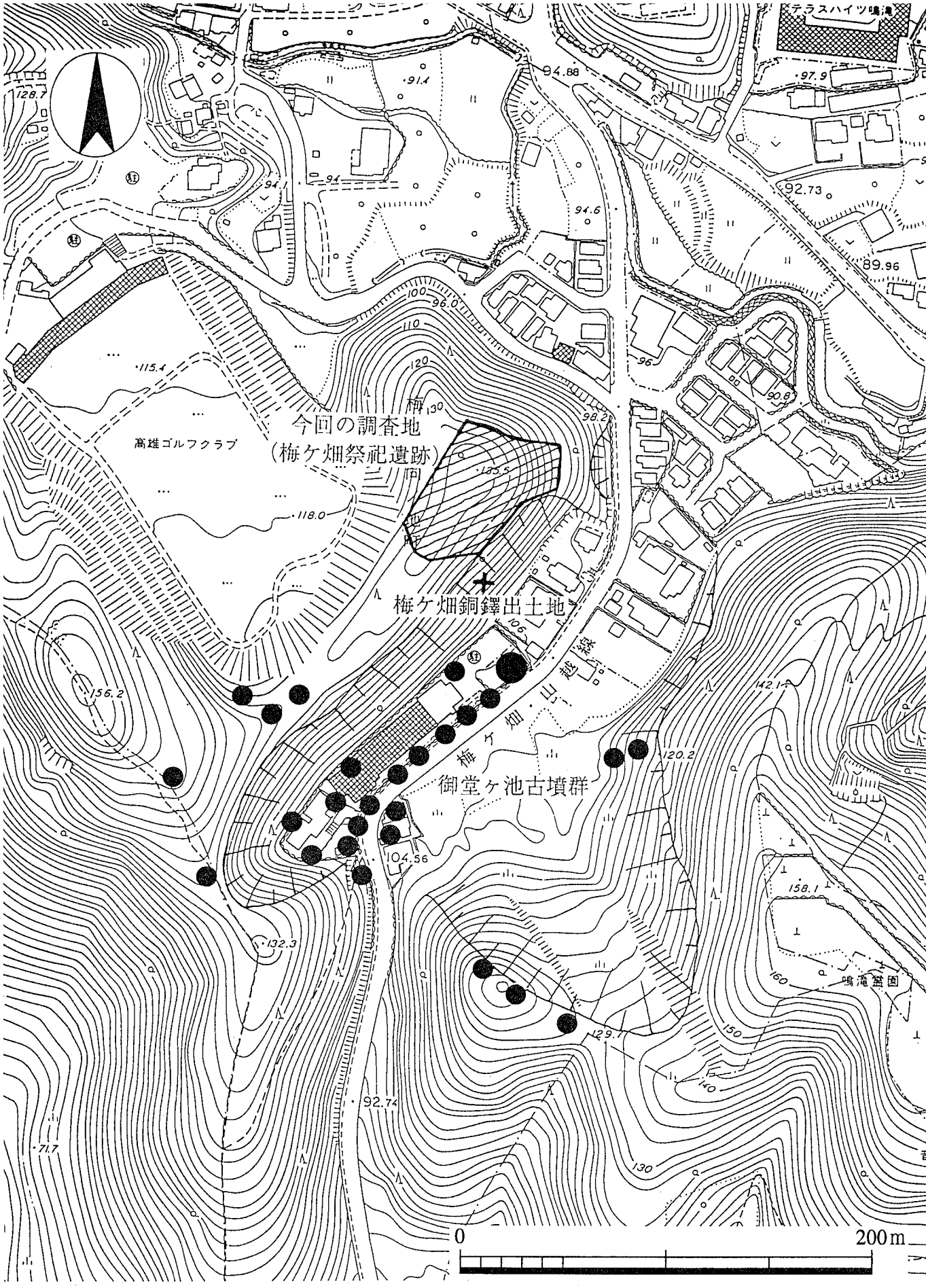


図２　調査箇所と周辺の遺跡

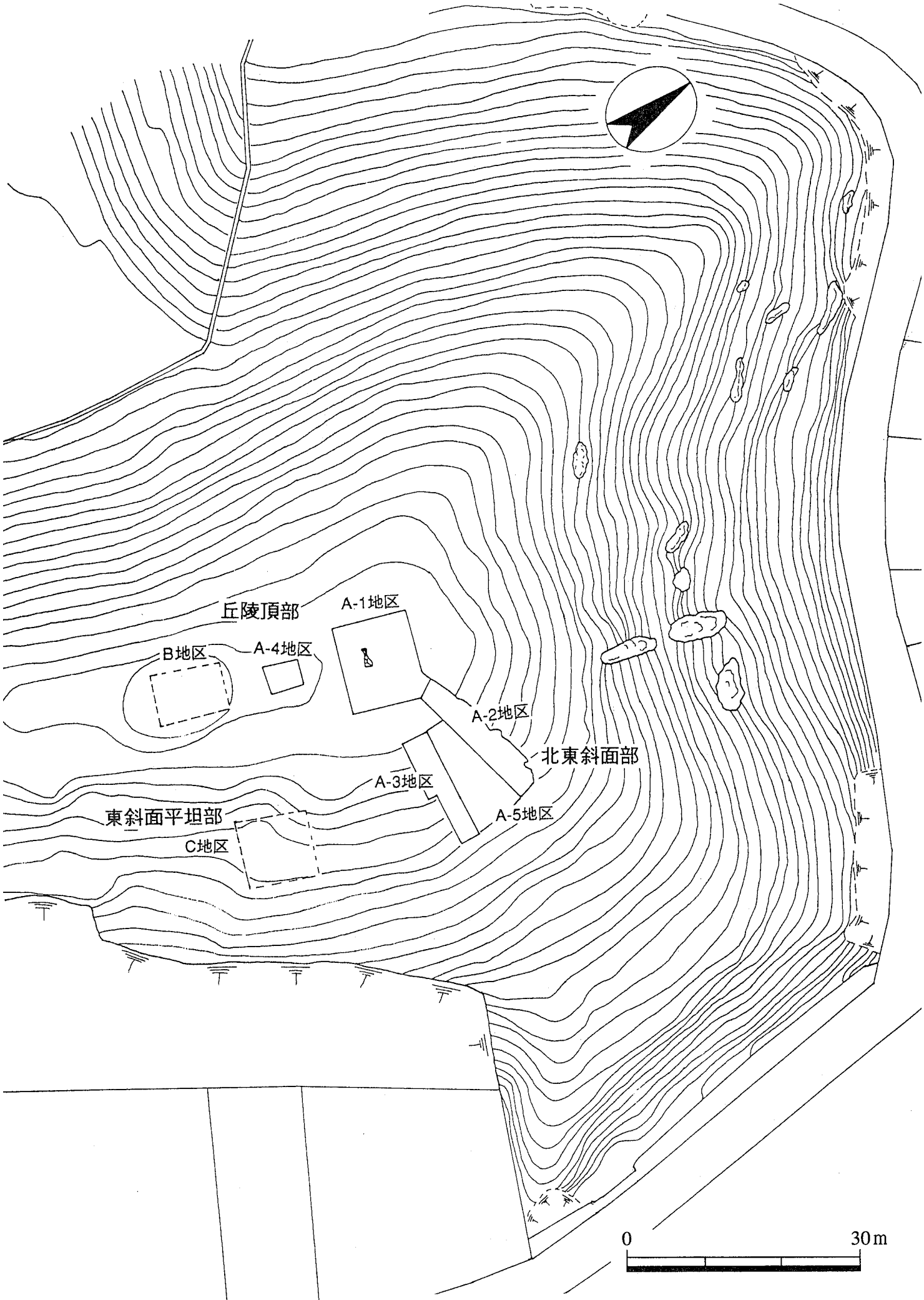


図３　調査地区配置図

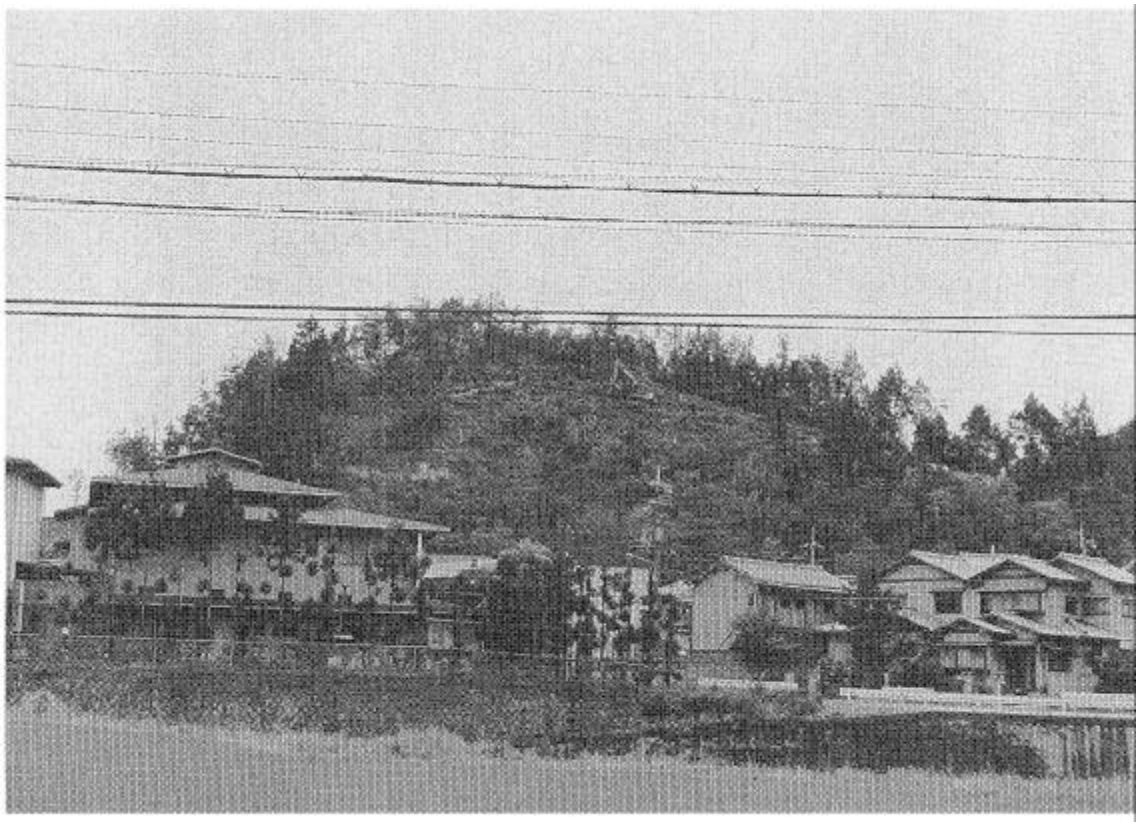


写真１　調査前の丘陵（北東から）

写真２　丘陵頂部（A-１・４地区、Ｂ地区）全景（北東から）

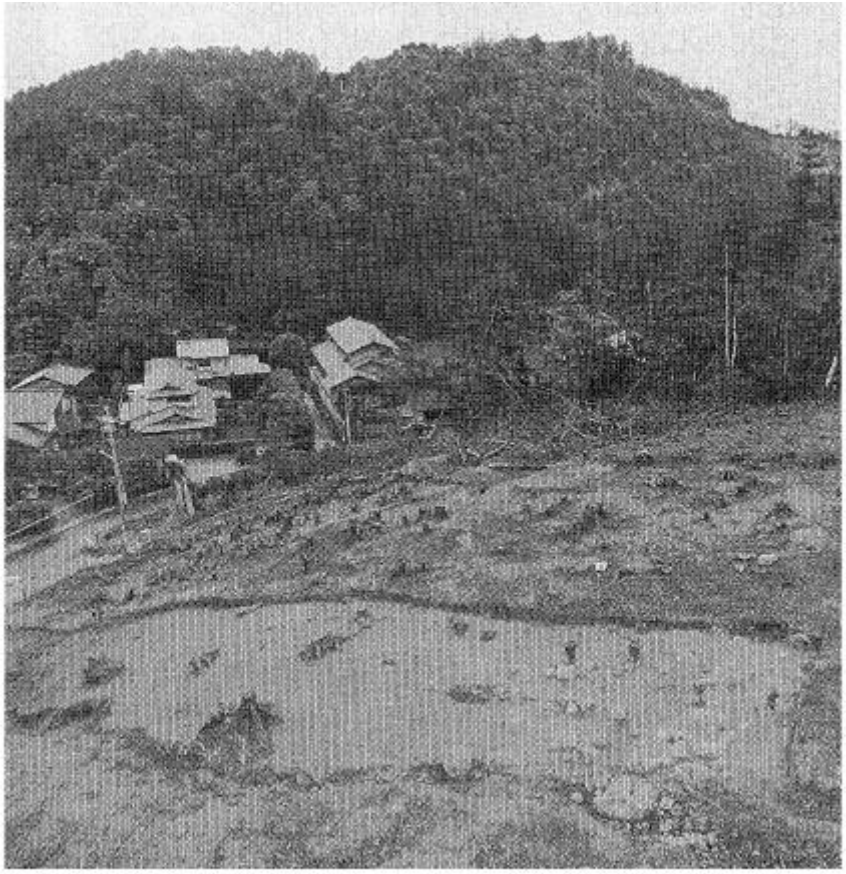


写真３　北東斜面部（A-２・３地区）全景（北西から）

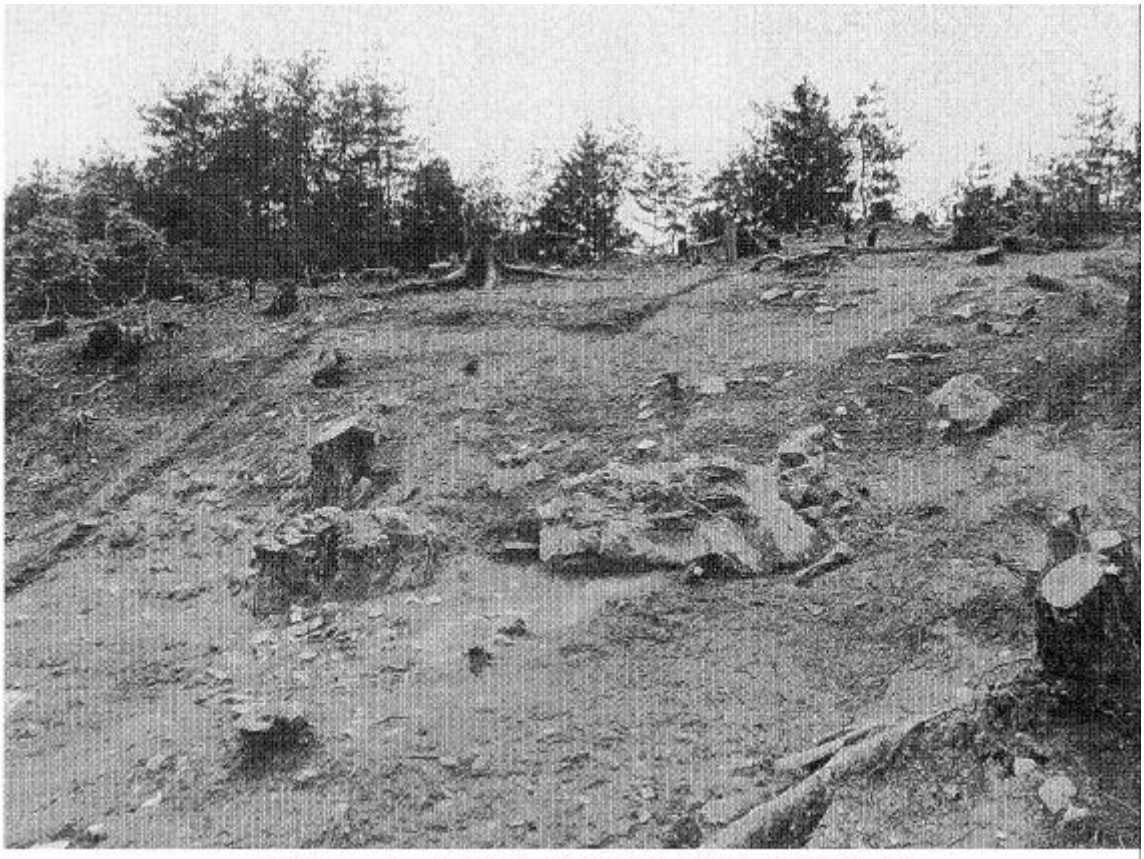


写真４　A-３地区　遺物検出状況（北東から）

写真５　A-２地区　遺物検出状況１（北東から）中央のものが二彩陶器壺片

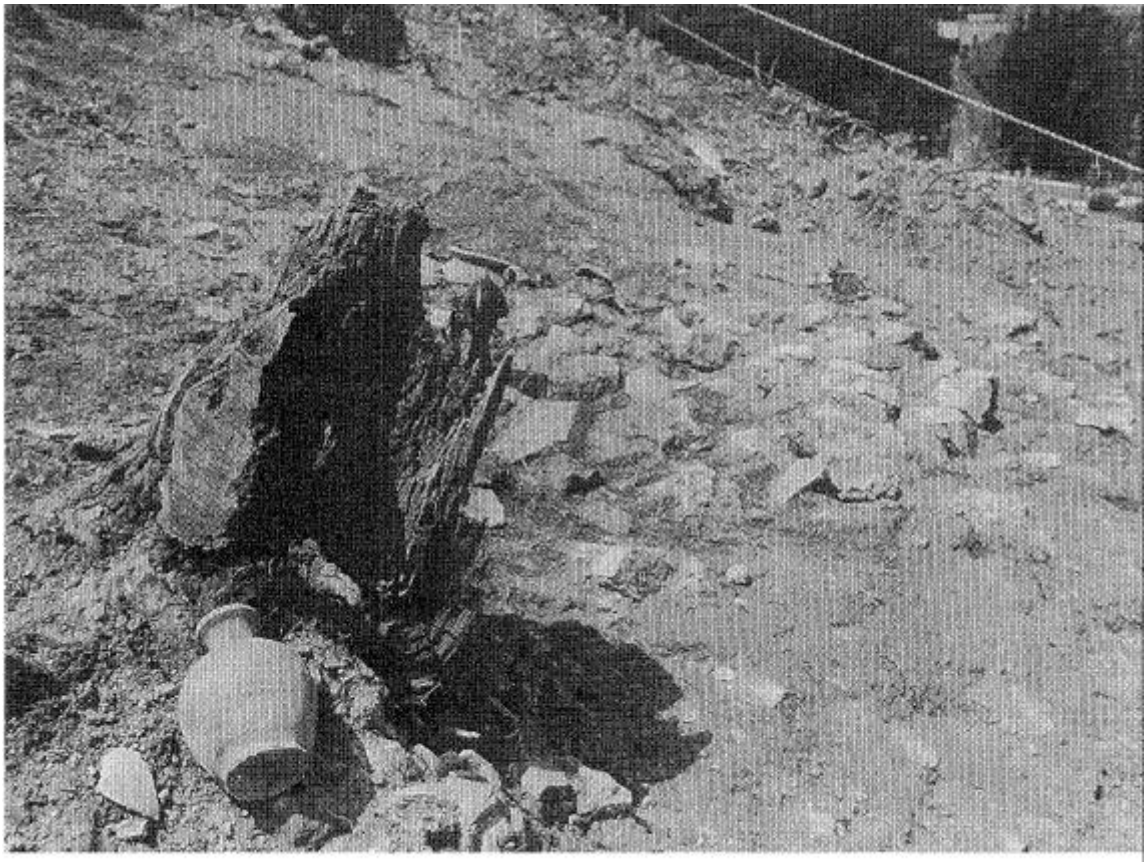


写真６　A-２地区　遺物検出状況２（南から）いちばん手前は須恵器瓶子